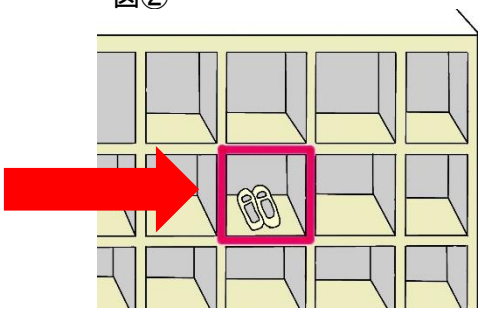
見えにくさへの支援⑤

～見えにくさに配慮した校内環境を整える～

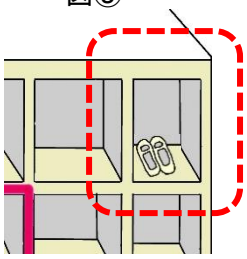
見えにくさがあると言っても、見え方は人それぞれです。そのため、配慮をするときには、当事者である子どもと教室などの環境を確認しながら、必要な支援を考えていきます。例えば、図 1 のように弱視の子どもで下足箱の位置が把握しにくいという場合、下足箱を分かりやすいようにします。

図①

図②



図③



右図のように色のコントラストをはっきりさせるように周りをカラーテープで囲うと、どこが自分の場所か分かりやすくなります。

ですが！ 図②だと目立ちすぎて、他の子どもの目を気にしてしまうことも十分考えられます。そこで、選択肢として図③のような配置にすることも有効です。点線の枠で示した角の場所を対象の子どもの下足箱に変えることで、視覚的なコントラストに頼ることなく、目立たずより自然なレイアウトで分かりやすくなります。支援を行うときには、子どもの能力と配慮の工夫の選択肢と、そしてプライドに折り合いをつけるように行い、さらに、できるだけさりげなく行えるとよいですね。

また、見え方を確認するために、「大丈夫？見える？」とか、「分かる？」といった問いかけは、見えにくさがない人の見え方を想定しての質問になりがちなので注意が必要です。生まれながらに見えにくさがある子どもにとっては、その見え方が通常なので、「大丈夫、見える。」と答えてしまったり、よく分かっていなくても分からないとは返答しにくくて、つい「分かる。」と答えてしまったりすることもあります。

そのため、例えばプリントの場合なら、「どっちが見やすい？」と選択しやすいように見比べてもらうなどの投げかけをします。すべてをそのように配慮するのは難しくても、できる限り自分で選べるようにするとよいですね。そうして、自分の見えやすさを知ること、そして、必要な配慮を自分から申し出られるようになることは、自己理解を進める取り組みの一環となります。

また、プリントの文字は、明朝体だと横線が細いため読みにくくなりがちです。そのため、見やすいフォントの種類も併せて検討する必要があります。さらに、プリントの表面が折り込み広告やラミネートのように光沢があると、光の反射で見えにくくなることもあります。こうしたポイントも踏まえて、子どものより見えやすい環境を整えていけるとよいですね。

文字のサイズ

光の反射具合　フォント　など